

校内の樹々も芽吹き始めた今日、この春の佳き日に、さいたま市長 清水隼人様、さいたま市教育委員会教育委員 野上武利様、PTA会長 大塚成人様、後援会長 東條裕之様、同窓会長 小野安史様をはじめ、多くの御来賓の皆様、並びに保護者の皆様の御臨席を賜り、さいたま市立大宮西高等学校第五十二回卒業証書授与式を挙行できますことは、大きな喜びです。

三二四名の卒業生の皆さん、卒業おめでとう。皆さんの卒業を心から嬉しく思います。また、お子様をこれまで慈しみ育んで来られた保護者の皆様、誠におめでとうございます。立派に成長されたお子様の姿に、感激もひとしおかと拝察いたします。

さて、五年前の第四十七回卒業式は、三月十一日に行われました。後に東日本大震災と命名された大災害が発生した当日の午前中でした。この未曾有の災害は、直後の原子力発電所の事故と併せて、東北の被災地はもちろんのこと、わが国全土に、そして全国民に多くの課題を突きつけました。そして、それは未だ解決に至っていません。震災関連死を含め二万一千人の方が亡くなったり、行方が分からなかったりしています。避難生活を余儀なくされている方は、今なお十七万四千人に及びます。これは遠い昔の話でも、遙かな異国の話でもありません。

このことから、昨年の避難訓練の際に、皆さんにこうお願いをしました。皆さんは、人の一生の中では弱者ではなく、むしろ強者です。だから、大きな災害に見舞われた時には、まずは自分の命を自分で守り、その後には子供やお年寄りに手を差し伸べて欲しい。

このことを含め、私が校長として着任以来一年間、皆さんに期待してきたこと、そしてその場に応じて言葉を変えて、語り続けてきたことは、次のことです。

皆さんが成長すること、その結果、皆さん自身が自分の人生を豊かにすること、そして皆さん自身から周りの人々に、小さくてもいいから幸せの輪が広がっていくこと。

皆さんの感じる幸せが、他人の不幸せの上に成り立つのではなく、周りに影響して多くの人たちを幸せにしていけること。

皆さんの「善意」が、波紋のように、振動のように、家族、友人、恋人、隣近所から始まって、さいたま市、埼玉県、被災地東北、日本全土、そして中東やアフリカなど紛争や貧困や疫病で苦しむ国や地域、やがて世界中の全ての人々に、皆さんから発せられる微かな「善意」の振動が伝わって、誰もが今よりもほんの少しずつでも幸せになれること。

そして、そのことをまた、皆さん自身が自分の幸せと感ぜられること。

このことを、今日までの在学中よりも、卒業後になお一層、皆さんに求めたい。

そんなこと、僕には無理だよ、私にできるわけない。

確かに一人では、たいしたことはできないかも知れません。

でも大丈夫、皆さんは決して一人ではありません。少なくともここに三二四人います。後ろには、皆さんの思いを受け継ぐことのできる五七二人の西高生がいます。同じ思いを、これからも多くの高校生に伝えていける七十人の教職員がいます。

そして、以前にも話したように「たいしたことはできない」と「何もできない」は違います。「世界中の人々」とか「困っている全ての人」に対してはできなくても、自分の目の

前にいる人だったら、自分の身近にいる人だったら、何かできるかも知れない。自分でできるその「何か」が、すぐに世界平和に結びつかなくても、人を優しい気持ちにさせるとか、思いやりの輪が広がるとか、ほんの少しずつでも、世の中をより良い方向に向かわせることができるのだと、私は信じています。

そしてそれは、「いつかやろう」「明日からがんばろう」では駄目なのです。「いつか」とか「明日」が、誰にでも当然のごとく訪れる保証はどこにも無いのです。東日本大震災は、そのことを私たちに痛烈に突きつけました。だからこそ、今日できること、今できることを、精一杯にやり切って一日を終える。そうすることでは、不確かな未来を、確かな現在に変えていくことはできないのだと思います。

これが、卒業してゆく皆さんへ、大宮西高校が与える最後の宿題です。宿題の答えはどこにあるでしょう？

それは、皆さん一人一人の中にあります。皆さん一人一人の未来にあります。皆さん自身が、皆さん一人一人が、実はより良い世界の「未来」そのものなのです。

ここでこうして皆さんにお話しできるのも、これが最後、もうわずかです。

皆さんは、母校が数年後に中等教育学校へ改編されるといふ衝撃に激しく動揺しながらも、本校ならではの文化祭や体育祭、修学旅行や球技大会など、いくつもの学校行事に全力で取り組み、それらを存分に楽しみながら、己を磨き、仲間意識を育み、自らの進路目標に向かって努力してきました。

皆さんが三年生になってすぐ、私が初めて皆さんに話をした時、こう言いました。

私が西高に来たのは、中等教育学校の準備のためではありません。私が西高に来たのは、今ここにいる西高生の皆さんに、もっと西高を好きになつてもらいたい、もっと胸を張って、もっと自信に溢れて、西高を卒業して行ってもらうためです。皆さんが今よりも一歩でも前へ、一歩でも高く、進んで行けるように、がんばります。と。

そして、教職員の誰もが気持ちを一つにして、皆さんを応援し、皆さんの目標実現のために力を尽くしてきました。

今、こうして皆さんを目の前にして、皆さんがそれぞれ内心でどれだけ胸を張って、どれだけ自信に溢れて、どれほどの愛情を西高に抱いて卒業していくのか、それは皆さん自身にしか分かりません。

しかし、これまでに皆さんからは、頑張っている姿をたくさん見せてもらいました。そして、私はそれを「西高の誇り」だと言いました。その「西高の誇り」をもっと広く、もっと大勢の人々に伝えたいと言いました。

そこでは、皆さん一人一人が大宮西高校を代表する者であり、一人一人が大宮西高校そのものなのです。卒業してもなお、あなた方一人一人の前向きな取組のすべてが、「西高の誇り」なのです。そして、あなた方がこれからの人生の中で様々な困難に直面した時に、周りから「どうしてあなたはいつもそんなに前向きに考えたり行動できたりするのか？」と訊かれたら、胸を張って答えましょう。

「だって大宮西高校の卒業生ですから。」

あなた方に冬休みに考えて貰った宿題、「世界を、この世の中を、もっと良くするために、今の自分に何ができるか、何をしたらよいのか。」このことをいつも心の隅に留めおいて、「どうせできるわけがない」と諦めることなく、「誰かがやってくれるだろう」と人任せにせず、自分自身で考えて、勇気を持って行動してください。

私たち全ての教職員は、これからもずっと、今までよりもずっと、あなた方の活動に、あなた方が作る「未来」に、期待しています。

結びに、これまで本校の教育活動に深い御理解と温かい御支援を下さいました清水市長はじめ御来賓の皆様、並びに保護者の皆様に心より篤く御礼を申し上げます、校長の式辞といたします。

平成二十八年三月十二日

さいたま市立大宮西高等学校長 関田 晃